

[原著論文]

上海工商外国語職業学院における実践的な日本語授業の準備 —グループでの授業設計を中心に—

張 冬梅*

Preparation for Practical Japanese Teaching in Shanghai Industry & Commerce Foreign Languages College —Based on Collective Teaching Preparation—

Dongmei ZHANG*

Abstract

With the further development of the integration of the world economy, the education in China's higher vocational colleges ushers in the full-scale reform and improvement, and the reform of Japanese teaching in these higher vocational colleges is getting much more attention and greater importance has been attached to it. This thesis is centered on the present condition and problems of Japanese teaching in China's higher vocational colleges and it takes for example the present teaching condition in Japanese Department of Shanghai Industry & Commerce Foreign Languages College. By analyzing and researching the role of collective teaching preparation in practical teaching and practical ability training, the thesis concludes that collective teaching preparation plays an indispensable role in practical Japanese teaching and gives some suggestions on issues that should be noticed in collective teaching preparation.

KEY WORDS : practical Japanese teaching, teaching preparation, collective teaching preparation

1. はじめに

『高等職業大学の人材育成の強化についての意見』という指導要領の中には、中国における高等職業大学の人材育成モデルの基本的な特徴は、高等技術応用型人材を育成するのは根本的な任務であると述べられている。人材が社会のニーズに応じられるのを目指し、実践的な能力の育成を軸に学生の知識やスキル、素養構造と育成方案をデザインすべきである。そして、卒業生は基礎理論の知識が適度で、実践的な能力が高く、知識の幅が広く、素養が高いといった特徴を持つべき

だといくつかの要素が挙げられている。新しいカリキュラムと教育内容のシステムを構築し、実践教育の主な目的は学生の実践応用能力の育成で、教学計画に大きな比重を占めるべきであることも指摘された。高等職業大学の教育課程改革の一環として、「実践教育を通して、実践型と応用型の人材の育成」を主旨と特徴にして強調された。そこでは、従来の教科中心と異なる新しい学力の育成が意図されている。それと同時に、教育現場にいる一線の教師にも新しい授業力の向上を求めていることも考えられる。

本研究は上海工商外国語職業学院の日本語学部を例

* 上海工商外国語職業学院日本語学部

* Shanghai Industry & Commerce Foreign Languages
College Japanese Department

にし、職業大学における日本語教育の現状を分析し、グループでの授業設計の必要性と問題点について考察するものである。

2. 日本語学部の現状と課題

筆者が勤めている上海工商外国語職業学院は、中国の大きな教育改革を背景に2001年に創立された。日本語学部も、学校の創立と一緒に創立された。上海における職業大学の中では設立した時期が比較的早く、相当な規模を持つ大きな学部である。専門は、2007年まで「ビジネス日本語」「観光日本語」「科技日本語」を開設していたが、2007年以降は「応用日本語」だけを開設している。「1+N」という人材育成モデルにより、しっかりした言語基礎と「聞く・話す・読む・書く・訳す」の実践能力を持ち、外事・ビジネス・旅行などの分野において翻訳・通訳、教育、管理などに従事できる国際視野と創造力を持つ総合型の優れた人材の育成を教育目標に掲げている。既存の日本語学部の学生が700人で、日本語の専任教師が18人（そのうち：日本人教師3人）もいる。また歴史が浅い日本語学部が、試行錯誤しながら職業大学における日本語教育に積極的に携わっている。また積極的に社会実践と実習活動に参加するように学生を励まし、数多くの大きな活動において翻訳・通訳、ガイド、接待などの仕事に従事させており、各方面から高い評価を受けている。

わずか10年の間に、本学部を卒業した学生の数は既に2500人にも達している。しかし、教育目標から見ても、卒業するまでの成績と卒業の進路から見ても、大きな成果を成し遂げたとは言えないのではなかろうか。高い評価を受ける学生数はほんの一部で、思ったとおりに育成した優れた人材の割合はそれほど多くなかった。なぜそのような結果になったのだろうか。よく考えてみると、学生側の原因もあれば、教師側の原因もある。中国の場合は、国立大学と比べて、私立大学の進学予定者の質がそれほど良くないのがほとんどである。学生は学習意欲はもちろんのこと、適切な学習方法も見つからず、学習パワーも不足すると重ね、全般的に成績がなかなか上がらない状態になるわけである。

そして、日本語学部の教員は、ほとんど一流大学の大学院の出身であるが、若手教員が大半を占めており、卒業してからすぐ本学部で勤めているので、日本語教育に携わる経験が浅く、効果的な指導法については、

昔の教わる先生に影響を強く受け、主に教科中心と文法中心で、手探りしながら試行錯誤をしているのが現状である。

このような現状を見たら、国からの教育改革の呼びかけの声も高くなるのに加え、職業大学の教師として、自分の授業の実態を真剣に見直す時代が来るのではなかろうか。いかに経験豊かでも、すべての授業がうまく展開できるという教師は多くないだろう。今の中国の高等職業大学の学生に対し、授業における実践的な内容がますます増えていくように要求されている。教員は教授法の改善、実践活動の設計、心理的なケアなど、色々な方面から授業の準備を工夫しなければならない時代が来ると考えられる。

中国国内における近年の教室内の「実践と応用」の活動の効果に関する研究の成果によれば、実践活動の実際は必ずしもその目標を十分に達成しているとは言えない。しかも、その理由について担当教師の指導力の不足に帰せられ、その結果、解決策としては、研修を通して教師の資質・能力を向上させることなどが提言されている¹⁾。だが、本研究において、本学部の場合は、教員の研修はもちろんのこと、グループでの授業設計こそがよい実践教育活動を確保する根本的な要因であると考えられる。つまり、実践的な日本語の授業を推進するためには単に研修などで教師個人レベルの指導力の向上への支援だけでは十分ではなく、実践活動の設計と授業の設計を巡る教師間の閉鎖的な現状を改善し、グループでの授業設計をもっと深く進めることが、取り組むべき基本的な改善策と考える。

3. グループでの授業設計の必要性和メリット

授業を成功させるためには、授業の準備はきわめて重要な一環としなければならない。一コマの授業は教育芸術の一過程だとしたら、授業の準備は教師のその芸術表現の序幕になる。授業の準備は実は教師が自ら一つ一つの授業の教育活動の内容、時間と空間構造の規範と最適化の過程である。これはまた繰り返しながら、徐々に成長して展開していく過程でもある。ほとんどの教師はそれぞれ個人任せで自分で授業を準備する形を採用しており、みんな独立している。こういう形で教師が教材に対し、自分なりの考えと理解が強調でき、そこで、教室の中に百花斉放という多彩な光景が現れることができる。

しかし、個人任せで授業を準備するのがある程度の限界がある時もあり、独自の個性と見解を求めすぎ、

授業に出てくる一部分の基礎的な知識や基本的な能力の浸透とトレーニングが見落とされる可能性もある。各教員が自分の所属する一つの領域に閉じこもり、教員間の交流が少なくなる傾向も見られる。そこで、教員間の相互協力が新しい課程標準の中にも特に強調されている。ある専門家は教師間の相互協力の七つのメリット（心理的なサポート、新しいアイデアの発見、模範と協力、パワーをもらう、仕事の負担を減らす、動機を強化する、変革を支持する）²⁾をも指摘した。

教師間の相互協力の一つとして、本学の日本語学部は2002年からグループで授業を設計するという形を採用している。これは中国の学校では新しい制度ではなく、さまざまなメカニズムが既に整っている。グループで授業を設計するやり方は、50年代から中国の学校に導入された「教研組」³⁾という校内研修組織の中で運営されている。「教研組」は、学校の同一教科の担当教師のもと、単元づくり、教材、授業法の検討・改善、公開授業、勉強会などの研修活動を行い、当該教科における専門的な資質・能力を高めるための研修組織である。その目的は、教師の専門的な成長、資質・能力の向上に重点を置き、各教科の教師の専門水準を高めることである。「教研組」のリーダーは「教研組長」である。「教研組」の仕組みは、本学部の場合は、以下のような形である。「日本語聴力教研組」と「応用日本語教研組」において、それぞれ「備課組」⁴⁾が設けられている。一学年を一つのグループとしてこの学年に属している教師が集まっており、「〇〇備課組」に所属している。各学年レベルの「備課組」では、その学年レベルでの単元づくり、授業法に関する検討会などを行うものである。ここでは本学部のグループでの授業設計の実施についての必要性、試みと効果を考察したい。

日本語学部の場合は、一学年にクラスが7～10あり、教科書と教学進度が統一されている。教科担任制が導入されており、一人の日本語教員が一つのクラスを中心に授業を担当するのが殆どである。大体教員一人が35人～40人ほどの学生と毎日対面している。進学予定者の中に、上海甘泉中学校で六年間も日本語を勉強し、日本語能力試験の2級か1級に合格した学生もいれば、日本語がほぼゼロで、中国の地方方言の影響で発音さえ正しくできない学生もいる。クラスの人数が多く、レベルが揃わない学生に教えるのが難しいということを毎日痛感している。言語の教室と言ったら、人数が少なければ少ないほど一人当たりの練習時間が多し、効果も出てくるはずである。

特に学部のほうが教育改革の呼びかけで、タスク中心の指導法を導入しながら、日本語言語能力訓練の教材開発においてもこの指導法の思想を一貫している。だから、タスクの設計とか、実践的な日本語の授業が今さらながら要求されている。授業用の活動をたくさん設計しなければならない。タスク中心の指導法を実行してから、教員一人当たりの仕事の量が多くなり、うまく準備できるかどうかが問題になる。人数の多いクラスの授業がうまく展開できるようにグループでの授業準備はもっと必要になる。

日本語学部のグループでの授業準備は、各教研グループを中心に教師を組織し、集団的に大綱と教材に目を通し、学生の状況を分析しながら、学科の教育計画、授業準備の分解、授業準備の大綱の検定、授業実践の情報のフィードバックなどの一連の活動である。これらの一連の活動を通じて、教員たちがたくさんのヒントを得ることができた。教師に与えられたタスクにレベルの違う学生がそれぞれどんな反応を示すか、どのように積極的にいい環境を作り、学生が自分の興味のある質問に探求しながら自主的に問題を解決する力を育成するか、どのようにして学生がグループ学習を通し、答えが求められるようになるかについて分析しながら、いろいろな授業のアイデアが出てくる。

また、教員間に、特に同じグループの教員間に（教育内容により熟知するので）互いに講義を参観し、授業を評価するのが奨励されている。評価した時、できるだけ縦に比較しながら、参観された教員の今回の授業の中には従来より合理的、科学的な部分を探し出す。また、今回の授業はどの方面が革新的なものであるか（たとえ少しだけでもいい）指摘し、その創造的な成果を積極的に肯定する。教員が様々な指導法を試みるのを勧め、次第に自分の個性に富む教授法を改善していくのを助ける。特に若い教師に対し、さらに納得できるように詳しい説明をし、「どうしてそのように改善してほしいのか」「どのようにやるべきか」とはっきり原因を言い、理解させる。つまり、評価者であれ、評価される教員であれ、誰でも平等交流の形で評価の中に学び、一コマの授業を検討することを通し、多くの教員の授業力を向上し、学級の動力を動かすという目的に達する。

詳しく説明すれば、グループでの授業設計のメリットが次の通りである。

1) グループの知恵を十分に発揮し、知識の共有ができる上に、教育効果が著しく良くなる。ほとんどの

教師は、授業の前に一人で授業の準備をするが、グループでの授業準備に比べたら、後者のほうが学生に知識の伝授がより多くより深いと考えられる。

2) 学生の学習興味をそそることができる。教育効果の高まりにより、学生が気楽に勉強することを感じ、しかも自分が短い時間に多くのことが学べ、学習の中に一種の達成感を探し出すことができ、それにより彼らの学習の興味がますます高まっていく。

3) 教員の仕事に対する積極性を高めることができる。教員間の相互理解を増進しながら、お互いの交流、協力、学術研究の楽しい雰囲気が醸し出せる。毎回のグループでの授業準備の発表には一人のスピーカーがいる。スピーカーとしては、自分の最も優秀な一面を同僚に見せたいのは当たり前のことだ。発表の前に、まじめに授業の準備をしておき、グループの授業準備の検討時間が大体40分ほどだが、当該教員が各種資料を調べる時間が数時間、さらに多くの時間が要る。そして、グループでの授業設計のときに、ある知識点について議論するのに参加しながら、雰囲気が盛り上がるにつれて積極的に討論の雰囲気に溶け込んでいく。だから、どの方面から言っても、グループの授業設計は教師の積極性を高めることができる。

4) 授業の重点と難点が正確に把握でき、教師の全体的な授業力を絶えず向上させることができる。これにより教育過程の研究活動を最適化させ、教員の教育上の認知と行為を、科学的かつ合理的な方向に変えられる。自らの研鑽、グループの検討、分業後のスピーカー、授業後のフィードバックなどの過程は、教師の専門的な能力が発展する過程でもある。この過程はデメリットを避け、メリットを発揮することに役立ち、教員の高い起点からの発展にも繋がっている。

5) 学校の既存の教育資源が開発でき、優れた先生の教學経験が広められ、若い先生の成長サイクルが短縮でき、学校の教育経費が節減できる。

4. グループでの授業設計の問題点と改善策

以上のように、皆の知恵を集め、皆の利点を採択するグループでの授業設計を深めることにより、教育の効果を高め、資源の共有が実現できるようになる。グループでの授業設計は課程改革、学校の発展、教師の成長に果たす役割が否認できない。その一方、グループでの授業設計は形式だけのことになってしまう時もあり、教育の質の向上、教師と生徒の共同発展を妨げることにもなりうる。

現在のグループでの授業準備の現状には次のような現象もあるようだ。一部の教師が多量の時間と精力を費やした「準備」は、形式上は「コピー」——教材や参考書の中に書いてある教育内容をコピーする、実質的には「頭を使わずに」——ただ教材や参考書の内容を写し、目的は「学校の検査に対処するため」で、私は授業の教案を持っていると示すだけである。これは一種の簡単な、受動的な「盗作式」の教案準備である。さらに、パソコンの「グループでの授業準備」の受益者にもなる。前回のグループの教案を継承するあるいは直接教案を転載し、書き写すプロセスも省くことになる。これらの教師のように、他人の教案の「役割」を発揮しても、自分の教えているクラスの学生を実際に把握できるかどうか、授業がうまく展開できるかどうかは問われるようになる。月日が経つにつれて、自分の授業力のレベルを高めるどころか、別の一種の教育の極端な境地に入る——思惟のパクリ、最終的に自分をも失ってしまうのではなからうか。あるグループでの授業準備は、観念がはつきりしないため、時には極端な所に至った。

改善策としては、次のように考えられた。

1) 個人準備を重視することである。理想的に考えたら、グループでの授業設計は教師それぞれの独立の準備活動を基礎に、個人準備の成果を分析し、検討し、完備させながら展開していく一連の創造的な活動である。個人の準備はその基本的な前提になるべきである。個人準備の基礎がなければ、いわゆるグループでの授業設計もないわけである。この意味から言うと、すべての教育の設計と手配は2回または2回以上の個人やグループの「クリア性」の検討があるべきだ。このように一種の制度として執行したら、非常に円満な結果になるのも当然だろう。

2) 現行の「備課制度」を強化することである。この制度自身に対する強化と規範を求めるべきである。執行と管理をしながら、責任、義務、管理、保障措置がフォローアップすべきである。そして、指導と宣伝を通して、すべての教師に自覚意識、責任意識を持たせる。

3) 「備課制度」の一部分を改善することである。グループの授業準備は個人の準備を基礎にして行わなければならない。そして、グループの授業設計が終わってもそのあとの修正はきわめて重要である。グループ全員の合意後、指導案が統一されて、この指導案は教育の行動綱領になるが完全に実行するかどうかは教員の一人一人が自分の判断ですべきである。統一され

た指導案に基づいて、自分の教えているクラスの実態を把握し、学生の実際のレベルに合わせて、自分の教育特長とスタイルを発揮しながら、指導案を完備する。これらのことを通し、自分のクラスの需要に相応しい理想的な授業の実現を求めることができる。

5. まとめ

どのようにグループでの授業準備の役割を発揮して、教師の専門技能を高めるのか本学部はずっと考えている。実は、グループの授業準備の意義は、教師の間に交流し合い、知恵の火花を衝突させ、教育資源の共有を実現することにある。これは皆で一緒に教学について研究することだ。教師たちは一緒に座り、授業のポイント、難点を検討しながら、授業をどのようにうまく展開するかについて討論する。すべての人は自分なりの考え方があるかもしれないが、若い教師は思惟が活躍し、年を取った教師は経験豊かである。交流を通して、上手は下手の手本下手は上手の手本のように互いに補完しながら、教材の理解を深める。授業の構想を開拓し、授業の教え方の意見をほぼ一致させながら、最適な教室の教育プログラムを形成する。適当な教授法と適当な授業設計は、必ず期待するいい結果が実現されると考えられる。

だが、教えることはただ教え方だけで決まるのではなく、本当の授業のデザインは教師がグループでの授業準備をもとに、もう一度のまとめ、アップと再創造、自分の特長が生かせ、個人的なポテンシャルを発揮する授業案をデザインするべきだ。このようにして、自分の教え方の個性がうまく発揮でき、学生の学習現状に応じて指導案を出すことができるはずである。

世界経済のグローバル化の発展につれて、中国の高等職業大学の教育は全面的な改革と発展の時期を迎えた。職業大学における日本語教育の改革も多くの注目と関心を集めている。職業大学にとっては、社会に適応する実践的な教育は理論教育に頼りすぎる状況を改善し、比較的独立の実践教育システムを探索しなければならない。目的に対して最も適切な方針・計画をたて、設計を行い理論の基礎教育は応用を目的に、必需、用に足るのを尺度に、概念の明確と応用の強化を教学の重点にするべきだ。専門科目は対応性と実用性を強化しているとき、学生に一定の持続可能な発展力を持たせるべきだ。本研究は中国職業大学の日本語教育の現状と課題をめぐり、上海工商外国語職業学院の日本語学部の教育現状を実例にし、グループでの授業

設計と準備活動は実践的な日本語教育と実践型人材の育成に果たす役割を分析したものである。グループでの授業設計が実践的な日本語教育において、無視できない役割をもっており、そして問題点や改善策も指摘するものである。

また、グループでの授業設計に必要で不可欠な学校の管理、学校外の支援としての教員間の交流と連携の在り方などについて検証する必要がある。それらを今後の研究課題として深化していきたい。

Received date 2013年7月20日

[注]

- 1) 郭元祥「综合实践活动呼唤教师的有效指导」『教育科学研究』2006年8月, p.27; 钱贵晴「综合实践活动课师资队伍的现状调查及发展对策研究」『贵阳金筑大学学报』2003年3月, p.101などにおいて指摘されている。
- 2) <http://www.cnki.com.cn/Article/CJFDTOTAL-CDJY200910008.htm>
- 3) 「教研组」の役割について、李莉「教研组制度与教师同伴指导制度之比较研究」『当代教育科学』2004年12月, p.44において論じている。
- 4) 「备课组」は、授業の指導案を作ったり、授業に関する検討会を行ったりする組織である。

参考文献

1. 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志(2002)『21世紀型授業作り48 教室で学ぶ』《创新培训模式促进教师成长》明治図書
2. 章兼中(1996)《英语教育学》山西高校联合出版社
3. 刘涛(2008)《教师专业合作的理论与实践研究》学位论文
4. 吕成栋(2012)《创新培训模式促进教师成长》师道・教研
5. 零玉英(2012)《高效集体备课应注意的几个方面》读与写(教育教学刊)